公募型学校推薦選抜 出題のねらい

国　語

Ａ方式・Ｂ方式ともに国語の基礎的な学力を問う問題です。現代文では、語句の問題から始まり、さまざまな形式で文章の論理を問います。古文では、単語・文法という基礎中の基礎から、その基礎にもとづく読解問題が配置されています。また、文学史問題も、大学入学後の必須知識として出題しています。

特に正答率の低かった設問にそのパーセンテージを付しました。特に記述のないものは60%以上のものがほとんどです。併せて参考にしてください。

Ａ方式

現代文の問題の常として、本問中の記述を根拠として説明を求める問題が中心です。

問一：ａ③など、漢字問題では同音異義語のある紛らわしい選択肢に注意しましょう。ｂは正答率が約20%と漢字問題の中で最も低いものでした。難しいことばですが、硬い文章の中には時折見かける語です。漢字問題は、解答は選択式ですが、手で書いて練習するのが習得の近道です。

問二：５は第１段落のまとめとしてふさわしい語句を問うています。６は「文字資料」が「制約」をはらむことの言い換えです。空欄の前後を見るだけでなく、必要に応じてその段落全体や前後の段落にも目を配りましょう。

問三：接続詞補充は、段落間の関係にも注目。たとえばイは次の段落頭「だが」と呼応して、「なるほど～だが…」といったん譲歩する構文です（正答率は20%台）。エは直後に「補足」とあるように、補足の段落であることを予告します。

問四：直後の、箸を使うことの例に即して考えるとわかりやすいでしょう。

問五：文の整序問題。イ「こうした」、ロ「この」がそれぞれ何を受ける代名詞かを考えます。正答率はやや低く、40%台でした。

問六：直前の段落に記憶が２種取り上げられていることに注目しましょう。特に「一人の人間」の記憶にとどまらない「世代を超えて受け継がれ」る記憶が重視されていることに着目しましょう。

問七：直前の文に「歴史的実態の解明」とありますが、これこそが文献史学・民俗学共通の目的です。正答率はやや低く、30%台後半でした。

問八：この段落が問いかけであり、直後２段落が解答であることに注意。その本文中の解答は方言の一例に即して書かれていますが、選択肢はそれをさらに一般化した形で書かれています。適切に一般化して書き換えられたものを選びましょう。内容把握とともに語彙力も問われます。

問九：問八と連動しています。方言にとどまらず、「民俗資料」から「歴史を……引き出す」ための原則が空欄にふさわしい、と気づけば正答に至ることができます。

問十：ここでも本文の内容理解とその適切な言い換えであることを判断する語彙力とが問われます。①は、「一見つながりのない意外な組み合わせ」が「民俗資料」と「私（たち）自身」という組み合わせを指す、等本文と一致します。このようにして判断してゆくと、②「本質的に適切な特徴を備えているはずの資料」が、文字資料は「不完全」であり、民俗資料もそれを「補完」するものにすぎないとする本文に合致しないことがわかるでしょう。正答率は20%強。

古文は、『古今和歌集』のひとつの和歌を、その成立の由来を説く文章とともに読む、という問題です。さまざまな情報を組み合わせてひとつの和歌（や文章）を読み解く方法は、大学の授業に通じるものです。とは言え、設問はいずれも基本的なものです。文法（品詞分解や敬語等）・単語を単体で問うばかりでなく、それらが組み合わされた設問もありますが、基本が押さえられていれば難しくはないでしょう。

問一：「に」の識別は、古文読解の能力を問うために頻繁に問われる問題です。基本的な和歌・文章について、品詞分解ができるようになっておきましょう。正答率はおおむね６割以上でしたが、５がやや低く20%台でした。

問二：動詞の活用に関する文法問題です。品詞分解に習熟していれば難しくないでしょう。

問三：内容の読解とともに語彙力が問われる問題です。

問四：基本古語を問う問題です。ハ「一定」は現代語「いってい」とは異なるのですが、正答率は30%を切っています。「いちぢゃう」で古語辞典を引いてみましょう。

問五：基本古語の知識を活用して現代語訳しましょう。「え～（打消）」、「そこばく」に注意。

問六：これも現代語訳を問う問題です。「かりそめに」等の単語に注意。

問七：省略された主語は誰か、敬語の適切な訳はどれか、を問う問題です。

問八：直前の「ことのよし」を受けて「さること」と答えています。その「ことのよし」は何か、を問う設問です。正答率はやや低く40%弱でした。

問九：文学史を含む、総合的な知識・理解を問う問題です。「令」は「～をして…しむ」と訓読され、使役を表します。漢文の基本的な知識です。

Ｂ方式

現代文は、和食文化が日本の地理から受けた影響についての文章。設問数は多くありませんが、特に問四・問七などは選択肢と本文とを照らし合わせて丹念に読む必要があり、それなりの解答時間を要するでしょう。

問一：ｂ⑤など、同音異義語のある紛らわしい選択肢に注意。漢字問題は手で書いて練習するとよいでしょう。

問二：甲が最も正答率が低く、16%でした。現代の硬質な文章や近代の文章には散見されるものです。「畢」も「竟」も、終わる、という意味。丙は選択肢にも難語が並びますが、いずれも硬い文章には登場するものです。文章語を評論文などを通じて学んでおきましょう。

問三：傍線部直後にあるように、「文化」が重視されていることに注意。

問四：以下、いくつもの段落に渡って具体例が展開します。選択肢の表現と逐一対照していきましょう。選択肢中の接続表現が本文中の論理関係に合致しているか、という点にも注意が必要です。

問五：傍線部が単なる疑問文ではなく、反語であることに注意。そのことと、「本醸造酒」の価値が本文でどのように説明されていたかに着目します。

問六：本文章はこの「ところで」で大きく前後２つに分かれます。文章全体の構成を問う問題です。

問七：各選択肢のキーワードが本文でどのように説明されているかに注意。

問八：「刹那」の意味を文脈に即して解釈する問題。

問九：和食文化とそれを取り巻く日本列島の地理的条件との関係について、最終的に筆者が提出した意見とは何か、を問う問題。

古典は、文学的・歴史的に著名な人物についての物語であり、かつ中世の物語であることから、文章の長さに比べて読みやすかったのではないでしょうか。語彙・文法に関する問題はいずれも基本的なものです。現代語訳問題も基本的な語彙・文法知識を組み合わせれば解けるでしょう。読解問題は、さらに傍線部前後を丹念に読むことで正解にたどり着けるものでした。

問一：「ば」の識別は古文読解の基本知識のひとつです。直前の活用形（未然形＋バの仮定条件か、それとも已然形＋バの確定条件か）、終助詞バヤの一部か等に注意。正答率はおおむね80%前

後でしたが、５のみ40％台でした。

問二：難読語は、読みだけでなく、意味も覚えておきましょう。古文の「六月（みなづき）」は他の12ヶ月すべての異名とともに覚えておくとよいでしょう。現在でも日常の折々に用いられています。

問三：どちらも学習用古語辞典に基本古語として掲載されている語です。「をこ」のような現代には用いられなくなった語、「あきる」のような現代とは意味の異なる語は特に問われやすいでしょう。

問四：古語の音便には、現代と異なるものがあります。マ行四段活用連用形のウ音便などは、現在では一部方言を除いて見られません。やや正答率が低く、30％を切っています。

問五：「御曹司」が目の前の人物を見て、弁慶でもなく、天狗でもないと考えた結果、「鬼神」だという結論に至った、というのが傍線部です。

問六：「よし」は仮定を表す副詞。わからない単語に出会ったらこまめに古語辞典を引きましょう。

問七：現代語訳とともに、この後の展開にも注目します。「…と言ふままに、隙間もなくぞかかりける。……半時がほど戦ひけれ」と戦いが続いています。

問八：同じ段落の「あきれて（こそは立ちにけれ）」（問三参照）や「これほどに…負けたることはいまだなし」などから読み取れることは何でしょうか。

問九：16は基本的な漢文訓読問題。漢文は、動詞→目的語の語順です。訓点を正しく書き入れられる語順であるか、を確認しましょう。

問十：18の「御曹司」が誰であるのかを問う問題は正答率がほぼ95％に達しました。一方、20の文学史に関する問題は正答率約78％と、やや差が開きました。

国語 ①

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。解答番号は 1 ～ 19 。

まず、民俗学の目的は何か。普通の人々の日々の暮らし、それが現在に至った来歴を解き明かすことである、というのが日本民俗学の創始者・柳田國男の考えである。世の中をより良く改めるには、現状がいかにして産み出され、問題点がどこにあるかを踏まえることが不可欠であり、その認識なくしては改良することもおぼつかない。未来をより良くするために現在とそれを生み出した過去を正しく知ること。それが、「経世済民」――世を経め民を済う――を掲げた柳田民俗学の企図なのだ。

（中略）

「普通の人々」の「日々の暮らし」、その 5 を考えるのが民俗学の目的だとして、それはどのような対象によるべきだろうか。

試みに、いま、ここに生きている私たちの日々の暮らしが、一〇〇年後にどのような形で残されているのか、想像してみよう。まず、私たち自身が書き残した文字、私たちをめぐって書き記された文字（戸籍や成績表や源泉徴収票やら）が一〇〇年後も残っているというのは十分にありそうなことである。未来に伝えられる資料として、文字（記号）は第一に推すべきものだ。

だが、それだけではない。私たちが使っている道具、施設といったモノも、私たちの生活を後世に伝える手がかりとなる。ほかにも、人々の脳裏に刻み込まれた記憶も、一〇〇年後に伝わるかもしれない。たとえ一人の人間が直接伝えることが困難でも、親から子へ、子から孫へと世代を超えて受け継がれ、後の世に伝えることが可能である。

ア 、時を超えて伝わる資料は、文字（記号）、モノ（身体的）[1]記憶の三種に大別できる（そして、この三種の記録

の一部分あるいは一側面は、テクノロジーによってデジタル情報に変換され、デジタル固有の強度と脆弱性を持つことも可能であるが、その問題はひとまず措いておこう）。さらに先を急ぐと、文字（記号）を扱うのが文献史学（歴史学）、モノを扱うのが考古学、（身体的）記憶を扱うのが民俗学、ということもできる。

さてそれでは、さまざまな資料のうち、「普通の人々」の「日々の暮らし」を考えるのにふさわしいのはどれか、ということが問題となる。通常、歴史を調べる際に用いられるのは、史料すなわち文字資料だろう。 イ 文字資料は、文字を読むことで過去の出来事を知ることができ、 ウ 、往々にして年月日まで記され、過去を知るにはすこぶる便利な素材である。歴史学が実質的に文献史学すなわち文字資料の学であることも、故なきことではない。

だが、本当にそれだけで良いのか。そこから「普通の人々」の「日々の暮らし」を辿ることができるのか、というのがここでの問いだ。そして柳田國男は、これに「否」と答えたのである。

「愛すべきわが邦の農民の歴史を、ただ一揆嗷訴と風水虫害等の連続のごとくしてしまったのは、遠慮なく言うならば記録文書主義の罪である」（『国史と民俗学』一九四四［ちくま文庫版全集26、四一八頁］）。柳田はそうカッパした。「天災に苦しみ、一揆に荒れ狂う」という農民像は、あくまで文字資料の産物に過ぎない。なぜか。文字は、リテラシーすなわち文字を読み書きする能力のある者のみが残せる資料であり、その能力は時代を遡れば遡るほど「特別な人々」に限られていく。しかも、書き記される内容は、当たり前に繰り返される「日々の暮らし」よりも、書き残そうとする意志のはたらく「特別な出来事」に傾いていく。

農民像に即していうと、近世の農民について書き残すのは読み書き能力を有する支配階層がほとんどで、彼らにとって最大の関心は年貢がきちんと上がってくること、もし何かアクシデントが生ずると、やれ「一揆嗷訴」だ「風水虫害」だと、大慌てで収入の危機を文字に記すこととなる。こうして残された文字資料から、「天災に苦しみ、一揆に荒れ狂う」農民像が出来上がる。しかしそれは、文字資料という 6 を通した近世農民の一側面に過ぎず、その全体像ではない。なるほど文字は便利ではあるが、「特別な人々」による「特別な出来事」の記録という本質的制約をはらみ、ゆえに「普通の人々」の

「日々の暮らし」を解き明かすリソースとしては、不完全といわざるをえないのだ。

誤解のないように付け加えておくと、こうした柳田の史学批判は、その後、文献史学においても真摯に受け止められることとなった。近世農民についていえば、多様な文献資料の多角的な読解から歴史的実態の解明が進み、「一揆嗷訴」と「風水虫害」に終始する農民像は、もはや過去のものといって良い。[2]こうした文献史学の進展は、民俗学にとっても喜ぶべきことであり、かつ、その進展にどう応えていくのか、民俗学の側のさらなる工夫が求められるところだ。

とはいえ、文字資料の原理的な制約は制約として残り続ける。この点を踏まえて話を進めよう。

「文字資料」だけに頼ることは限界がある。ならば、その限界を突破するために、新たな資料のヨクヤが切り拓かれなければなるまい。ここで見いだされたのが「民俗資料」である。それは何か。「普通の人々」の「日々の暮らし」そのものであり、極論すれば、そうした暮らしを営む私（たち）自身のことだ。

なにゆえ私たちが「資料」なのか。順を追って説明しよう。

X

たとえば、「箸を使う」という日々繰り返す当たり前の所作も、決して今この瞬間に自ら発明したものではなく、周囲の年長者たちに教えられたものであり、その年長者たちもそのまた年長者たちに教えられたものであり、という具合に、はるか以前に遡ることができる。言葉もそうだ。私たちは、いまこの瞬間に語りながらも、その大部分は自分ではない過去の人々が作り、使い、伝えてきたものだ。このように、私たちの日々のふるまいは、いま現在の出来事でありながら、本当に自らの発明発見である部分はごくわずかで、その大部分を過去の人々にイキョしている。私たち自身が「歴史」を宿した「資料」であるというのは、このような意味においてのことだ。

誤解を恐れずに例えるなら、私たちは、無数のアプリⅠをインストールされたスマホのようなもの、といえるのかもしれない。無数のアプリが起動するスマホのように、私たちは様々なふるまいが出来るわけだが、その大半は外部からインストールされたアプリのようなものはたらきなのであり、そしてそのインストールという操作を通じて、必ず「歴史」とつながっているのだ。

ここで厄介なのが、私たちに「歴史」が刻み込まれているというのは良いとして、[3]その「歴史」を一体どうやって引き出すのか、という難題である。なんとなれば、私たちに「歴史」が刻み込まれていようが、そのふるまいはどこまでも「現在」に属しているからだ。これがスマホならアプリの製造元に問い合わせれば済む話だが、残念ながら私たちに刻み込まれた「歴史」は、Ⅲ製造元も製造時期も不透明きわまりない。さて、どうしたものだろう。

柳田國男は、その読み解きの可能性を『蝸牛考』（一九三〇）で鮮やかに提示した。「蝸牛」とは、「♪デンデンムシムシ、カタツムリ」のカタツムリのこと。柳田は、このカタツムリを何と呼ぶか、全国各地の報告を取り集めて検討した。その結果、歴史的に日本文化の中心である京都とその周辺では「デンデンムシ（デデムシ）」が主流だが、東西にやや離れていくと「マイマイ」が、さらに離れていくと「カタツムリ」が、さらに離れていくと「ツブリ」が、最後に、東北の端と南西の端にいくと「ナメクジ」が用いられている、という分布傾向を見出した。そして柳田はいう。「若し日本が此様な細長い島で無かったら、方言は大凡近畿をぶんまわし［コンパス］の中心として、段々に幾つかの圏を描いたことであろう」（『蝸牛考（二）』『人類学雑誌』四二巻五号、一九二七、一六六頁。現代仮名づかいに変更した。）カタツムリの方言分布は、京都を中心とした同心円と見なしうるわけであり、そこから、水のハモンが中心から周辺へ広がっていく様になぞらえ、中心部がより新しく、周辺がより古いという時代差を読み取ることが可能となる。空間的差異から時間的推移を捉えることも不可能ではないわけだ。

エ 、早くも補足しておくと、このような「きれいな」同心円分布が見いだされるケースは実際には稀であり、カタツムリの方言分布それ自体も異論の余地がある。とはいえ、 Y というテーゼは、認めておいて差し支えないだろう。

「民俗資料」は、それ自体はどこまでも「現在」に属するものでありながら、必ず「歴史」が刻み込まれており、そして、その「歴史」は単体からは不可視だが、大量の比較を通じて空間差から時間差を抽出することが可能となる。ここに、「特別な人々」の「特別な出来事」の記録たる文字資料の不完全性を補完し得る、「普通の人々」の「日々の暮らし」そのものである「民俗資料」、すなわち、「私（たち）という資料」の可能性が立ち上がるわけだ。

問二 5 、 6 （解答番号同じ）に入る最も適当な語句を、それぞれ次の①～⑤の中から一つずつ選び、マークしなさい。

5
① 栄光と没落
② 来し方行く末
③ 車の両輪
④ 事の成否
⑤ 出来不出来

6
① オブラート
② サイクル
③ フィルター
④ コンセプト
⑤ リスク

問三 ア ～ エ に入る最も適当な言葉を、それぞれ次の①～⑥の中から一つずつ選び、マークしなさい（同じ記号は一度しか選べません）。

解答番号は ア が 7 、 イ が 8 、 ウ が 9 、 エ が 10 。

① いまなお　② しかも　③ ただし　④ たとえば　⑤ なるほど　⑥ まとめると

問四 ═══線部Ⅰ～Ⅲは、それぞれ何を例えたものですか。最も適当なものをそれぞれ次の①～⑦の中から一つずつ選び、マークしなさい（同じ記号は一度しか選べません）。解答番号は 11 ～ 13 。

Ⅰ アプリ 11　Ⅱ インストール 12　Ⅲ 製造元 13

① 過去の人々　② 後天的学習　③ 作法　④ 資料　⑤ 日常生活　⑥ 発明発見　⑦ 私たち

問五 次のイ～ホは、 X に入る文を、順不同で並べたものです。最も適当な順番に並べた時に、二番目と四番目に来るものの組み合わせを、後の①～⑤の中から一つ選び、マークしなさい。解答番号は 14 。

イ こうした一連のふるまいは生物学的本能ではなく、後天的学習によって獲得される。
ロ この日常生活は、無数の作法の組み合わせで出来上がっている。
ハ しかも、こうした所作は、いま現在の行為でありながら、確実に「歴史的深度」を有している。
ニ 私たちは「日々の暮らし」を営んでいる。
ホ 朝起きて、顔を洗って、歯をみがいて服を着る。

	二番目	四番目
①	イ	ホ
②	ニ	ロ
③	ホ	ハ
④	ホ	ロ
⑤	ロ	イ

問一 ═══線部a～dの漢字と同じ漢字を含むものを、それぞれ次の①～⑤の中から一つずつ選び、マークしなさい。解答番号は 1 ～ 4 。

a カッパ 1
① 機械油はジュンカツを良くする。
② 時間がないのでここはカツアイする。
③ 書類をイッカツして送る。
④ 手を振ってカッサイに応える。
⑤ 平和をカツボウする。

b ヨクヤ 2
① ヨクヨウのない話し方。
② 改革のイチヨクを担う。
③ 富に対してゴウヨクだ。
④ ヒヨクな土地。
⑤ 夕食前にニュウヨクを済ませる。

c イキヨ 3
① 助言をケンキョに聞く。
② 好きな人のイッキョイチドウが気になる。
③ 提案をキョヒする。
④ 地元をキョテンに活動する。
⑤ 目的地までのキョリを測る。

d ハモン 4
① ゼンダイミモンの事件。
② 専門家の会議にシモンする。
③ カモンを羽織に染める。
④ モンガイカンなので判断できない。
⑤ モンゴンを修正する。

（菊池暁『民俗学入門』による）

問六 ――線部(1)「(身体的)」とありますが、かっこに入れてこの言葉を補足している理由として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークしなさい。解答番号は 15 。

① 親子や兄弟姉妹で所作振る舞いが似てくるように、人間の行動は生物学的記憶と関わっているから。
② 個人の身体には祖先から受け継いだ特徴が見られ、その特徴を遺伝的記憶とみなすことができるから。
③ 茶道や武道など日本の伝統文化における所作のきまりも、歴史学の研究対象となりうるから。
④ 個人内の記憶や世代を超えた記憶は、言葉ではなく行動として現れることもあるから。
⑤ 一人一人の身体の動き、すなわち振る舞いが集まって社会の動きを形成しているから。

問七 ――線部(2)「こうした文献史学の進展は、民俗学にとっても喜ぶべきことであり」とありますが、その理由として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークしなさい。解答番号は 16 。

① 「多様な文献資料の多角的な読解」こそが、民俗学の研究方法の本質と言えるから。
② 「普通の人々」の「日々の暮らし」の来歴は、文献史学の進展がなければ解明できないから。
③ 世代間で引き継がれる言葉や行動を文献の中につぶさに見出すことで、民俗学も進展しうるから。
④ 農民像の詳細かつ正確な把握が、歴史学のみならず民俗学の有用性を際立たせるから。
⑤ 歴史学と民俗学の相互作用が、人々の過去の暮らしの実態を解明するのに寄与するから。

問八 ――線部(3)「その『歴史』を一体どうやって引き出すのか、という難題」とありますが、この難題に対する筆者の答えとして問題文中に述べられているものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークしなさい。解答番号は 17 。

① ある現象に焦点を当て、その変異体の分布から歴史的変遷を推測する。
② 様々な方言における語彙を分析し、各方言の話者の日常生活を描写する。
③ 同心円状に分布する現象を収集し、詳細に比較することで歴史を抽出する。
④ 普通の人々の日常の所作を、年長者からの聞き取りをもとに遡っていく。
⑤ 無数の史料を様々な角度から調査し、特別な人々の特別な歴史になることを避ける。

問九 Y に入る最も適当な一文を、次の①～⑤の中から一つ選び、マークしなさい。解答番号は 18 。

① 「私たち」から歴史を見出すのに文献資料は無用である」
② 「ある事象の分布はその歴史を反映している」
③ 「方言は最も有用な『民俗資料』の一つである」
④ 「方言はおおむね同心円状に分布している」
⑤ 「民俗学の方法論では比較と抽出が要となる」

問十 問題文における論の進め方の説明として、**適当でない**ものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークしなさい。解答番号は 19 。

① 一見つながりのない意外な組み合わせを提示し、二者の間を順序だった説明や比喩により結びつけていくとともに、柳田國男の有名な考察を紹介することにより、民俗学がどのように目的を達成するのかを総合的に解説している。
② 柳田國男による痛烈な史学批判を紹介すると同時に、筆者なりに噛み砕いた説明を提供することによって、本質的に適切な特徴を備えているはずの研究資料から必要な情報を抽出する困難さをあぶり出している。
③ 多くの読者にとって新しいと思われる考え方を説明するため、その核心部分を身近なものに例え、かつ例えたものとの相違点を指摘することで、民俗学が抱える問題点を浮き彫りにしている。
④ 民俗学が目指すものを最初に明示し、その達成に役立つ可能性のある資料の種類を列挙した後、それらのうちの一つが最適である理由を多角的に述べることにより、この学問分野の重要な考え方を読者に示している。
⑤ 柳田國男の文章を引用することにより、普通の人々の日々の暮らしを考える際の文献資料の難点を指摘しつつも、分析手法の高度化による難点克服の試みにも言及し、読者が単純すぎる理解に陥ることを防いでいる。

(国語①問題　おわり)

国語 ②

次の【A】は、「古今和歌集」に載る素性法師の和歌、【B】と【C】は、その和歌について述べた文章です。それらを読んで、後の問いに答えなさい。解答番号は 1 ～ 29 。

【A】

仙宮[注1]に菊をわけて人のいたれるかたを詠める　素性法師

ぬれてほす山路の菊のつゆのまにいつか千歳を我はへにける[1]

（『古今和歌集』による）

【B】

昔、もろこしに、淮南王劉安[注2]、ふかき山よりながれ出でたる川のほとりに逍遙[しょうよう]しけり。この川に美しきさかづきの流ければ、を見て、この川上にも人のすむにこそとふしぎにおぼえて、川ばたに付きてたづね上るに、[2]えもいはぬ菊の、そこばく咲きみだれたるをわけ行きて見るに、[3]ゆゆしげなる仙家あり。仙人、まどゐして薬を合はするなりけり。仙人曰く、「いかにしてここには来たりつるぞ」と云々。客曰く「しかしか」と、ありのままにかたりければ、「さては、汝[なんぢ]、この所に縁あるにこそありけれ。ここは仙宮なり。山路の菊を汝がわけつるとき、菊の露のしたたりにあたるゆゑに、[4]すでに一千歳をへたり」と云々。客曰く、「この仰せすこぶるふしぎなり。我ここへ来つるとき、わづか[5]に片時なり。何のゆゑに一千歳をふ[a]べきや。[B]ここにとまり侍らむことしかるべしといへども、ふる里をばかりそめに立ち出でしあとのこともおぼつかなし。立ちかへりて見て、[C]かへりまうで来む」とて、仙薬を合はすることはしりたりけるを、取りて、我もくひ、ぐ[b]したりける犬にもくはせて、かへりきてふる里を見れば、跡かたもなくなれり。昔、山なりし所は海となり、海は山となれり。わが家は、跡かたもなくなりてうせたり。よはひ八十余ばかりなる老翁のあるに、ことのよしをとへば、[D]「さることは、われらが七世のおほぢの代に[8]こそ承り及べれ」と言ひければ、さて、ロちからなくて、またもとの仙室へかへりきて、仙人となれり。

（『運心院殿説古今集註』による）

【C】

ぬれてほす山路の菊のつゆのまにいつか千歳を我はへにけむ

「いつか」とは、早晩と書くなり。「我はへにけむ」とは、唯[ただ]うちも読むべし。素性、仙人なるよし、分明なり。さて、かくのごとく「我は」と詠むか。仙人たることは、家隆卿[かりゅうきょう]の歌に素性現じて、「我は仙人なり。今も仙郷にあり」とて、齢[よわひ]なき体ありしとなり。ハ一定身上を「我はへにけむ」と詠むなり。

（『運心院殿説古今集註』による）

注1　仙宮＝仙人の住む宮殿。「仙家」「仙室」に同じ。

注2　淮南王劉安＝中国前漢の高祖の孫。仙薬を服し仙人になって昇天し、さらに、その残った仙薬をなめた犬や鶏まで昇天した、という話が伝わる。

問一 ═══線部1～8（解答番号同じ）の「に」の文法的説明として最も適当なものを、それぞれ次の①～⑥の中から一つずつ選び、マークしなさい（同じ記号を何度選んでもかまいません）。

① 格助詞　② 接続助詞　③ 副詞の一部
④ 形容動詞の連用形の活用語尾　⑤ 完了の意味の助動詞の連用形
⑥ 断定の意味の助動詞の連用形

この歌の心は、山路の菊の露にぬれたる袖の、ほすほどもいまだなきひまに、いかでか我は千歳をへにけむとなり。ぬれてほすは、山路の菊をわけ行き、かの菊の露にぬるる義なり。その露にぬれたる袖の、いまだ[c]ぬひまに千代をへたりといふなり。

（『古今集註』による）

問二 ═══線部a「ふ」、c「ひ」についての、次の文法的説明の 9 ～ 12 （解答番号同じ）に入る最も適当なものを、 9 ・ 11 については後のA群の①～⑤の中から、 10 ・ 12 については後のB群の①～⑥の中から、それぞれ一つずつ選び、マークしなさい（同じ記号を何度選んでもかまいません）。

a「ふ」＝ハ行 9 活用動詞の 10 形
c「ひ」＝ハ行 11 活用動詞の 12 形

A群（① 四段　② 上一段　③ 上二段　④ 下一段　⑤ 下二段）
B群（① 未然　② 連用　③ 終止　④ 連体　⑤ 已然　⑥ 命令）

問三 ═══線部b「ぐ」に相当する漢字が**当てられない**ものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークしなさい。

解答番号は 13 。

① ぐ足　② ぐ奉　③ ぐ申　④ ぐ象　⑤ ぐ合

問四 ═══線部イ「ゆゆしげなる」、ロ「ちからなくて」、ハ「一定」の意味として最も適当なものを、それぞれ次の①～⑤の中から一つずつ選び、マークしなさい。解答番号は 14 ～ 16 。

14 イ「ゆゆしげなる」
① 立派そうな　② 恐ろしそうな　③ 不吉そうな　④ 楽しそうな　⑤ 賑[にぎ]やかそうな

15 ロ「ちからなくて」
① 力及ばず　② がっかりして　③ 気力が失せて　④ 諦めて　⑤ どうしようもなくて

16 ハ「一定」
① いつでも　② 確かに　③ 仮に　④ 相変わらず　⑤ もしかすると

問五 ═══線部A「えもいはぬ菊の、そこばく咲きみだれたる」とは、どのような情景を記述したものですか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークしなさい。解答番号は 17 。

① 美しいとはとても言い難い菊が非常に多く咲き乱れている情景。
② 感嘆を禁じ得ない菊がどこまでも果てなく咲き乱れている情景。
③ どことなく奥ゆかしげな菊があたり一面に咲き乱れている情景。
④ 言いようのないくらい見事な菊がたくさん咲き乱れている情景。
⑤ 何やら曰くありそうな菊があちらこちらに咲き乱れている情景。

問六 ═══線部B「ここにとまり侍らむことしかるべしといへども、ふる里をばかりそめに立ち出でしあとのこともおぼつかなし」とは、どういう思いを述べたものですか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークしなさい。解答番号は 18 。

① こうしてずっと仙宮にとどまるのが恐らくよいのだろうけれど、何気なく出てきたふる里に別れを告げてもきたい、という思い。
② もう長らく仙宮にとどまっているのだとしても、少し前に出てきたはずのふる里がどうなっているのか確かめたい、という思い。
③ 仙宮にとどまることになるのは望むところではあるが、ちょっと思い立ち出てきたふる里のことも気がかりである、という思い。
④ 仙宮にとどまり続けるべきであるのだろうけれど、一旦出てきたふる里の後始末もどうにかしておかねばなるまい、という思い。
⑤ 最早[もはや]このまま仙宮にとどまり続けるしかないのであろうが、ほんの軽い気持ちで出てきたふる里の行く末も心配だ、という思い。

問七 〰〰線部C「かへりまうで来む」の現代語訳として最も適当なものを、次の①～⑥の中から一つ選び、マークしなさい。解答番号は **19**。

① 帰って参りましょう。
② 帰って参るでしょう。
③ 帰って来ることにしよう。
④ 帰って来ることだろう。
⑤ 帰ってお何いして来ましょう。
⑥ 帰ってお何いして来るでしょう。

問八 〰〰線部D「さること」とは、どういうことですか。その具体的内容として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークしなさい。解答番号は **20**。

① 川の上流の深い山の中に仙宮があって、仙人たちが不老長寿の仙薬を調合しているらしいということ。
② 淮南王劉安という人物がこの里に住んでいたが、ある日突然、行方不明になってしまったということ。
③ 仙宮に迷い込んだ淮南王劉安がふる里に戻ってみると、わが家がすっかりなくなっていたということ。
④ 千年が経つ間には、里の自然も変化し、そこに住む人々の様子も大きく変わるものであるということ。
⑤ この里に住んでいた淮南王劉安が菊の花を求めて川をさかのぼるうちに、千年経っていたということ。

問九 問題文【A】～【C】について記した次の文章を読んで、後の（1）・（2）の問いに答えなさい。

問題文【A】の場合、素性法師の歌「ぬれてほす山路の菊のつゆのまにいつか千歳を我はへにけむ」は、その前に付された **21** によると、菊を分けて人が仙宮に到達した姿を人形に造ったものについて詠んだ歌であって、素性法師がその人に **22** 詠んでいる。「つゆ」とは、「菊の花の上にたまった露」と、「 **23** 」を意味する「つゆの間」の「つゆ」との **24** である。問題文【B】は、右の人形の姿に淮南王劉安の話を思い合わせて、素性法師が「ぬれてほす」の歌を詠んだものと捉えている。問題文【C】では、 **21** なく歌のみ挙げたうえで、その歌について解説しており、素性法師が自らの **25** を詠んだものと解しているようである。そして、その裏付けとして、素性法師が若々しい姿で藤原家隆の前に現れて、「我は仙人なり。今も仙郷にあり」と言った、という話を挙げている。家隆は、素性法師の「ぬれてほす」の歌を載せる『古今和歌集』が成立しておよそ **26** 年後、 **27** らとともに『新古今和歌集』を撰集しているのであって、確かに、仙人にでもなっていない限り、素性法師が家隆の前に現れることはあり得ないのである。

なお、素性法師の歌にも劉安の話にも出てくる菊は、中国から渡来したもので、 **28** の節句には、菊の花の上にたまった露や杯に菊の花を浮かべた菊酒を飲んで長寿を祈った。例えば、前漢の雑事を録した『西京雑記』にも、〰〰飲菊花酒、云令人長寿〰〰と記されている。

（1） **21** ～ **28** （解答番号同じ）に入る最も適当な言葉を、それぞれ次の①～⑤の中から一つずつ選び、マークしなさい。

21　① 序文　② 詞書　③ 序詞　④ 前句　⑤ 傍注

22　① 呼びかけて　② 頼まれて　③ なりきって　④ 誘われて　⑤ 自らの境遇を重ねて

23　① 涙を流している間　② 全く知らない間　③ 咲いている間　④ ごくわずかの間　⑤ 長い年月の間

24　① 掛詞　② 序詞　③ 枕詞　④ 縁語　⑤ 折句

25　① 体験　② 見聞　③ 感動　④ 本性　⑤ 苦悩

26　① 二百　② 二百五十　③ 三百　④ 三百五十　⑤ 四百

27　① 源実朝　② 藤原公任　③ 在原業平　④ 能因法師　⑤ 藤原定家

28　① 人日　② 上巳　③ 端午　④ 重陽　⑤ 七夕

（2） 〰〰線部の白文「云令人長寿」の訓読文として最も適当なものを、次の①～⑥の中から一つ選び、マークしなさい。解答番号は **29**。

① 令人を長寿にすと云ふ　② 令人をして長寿せしむと云ふ
③ 人に令して長寿たらしむと云ふ　④ 人に令して長寿せしむと云ふ
⑤ 人を長寿にすと云ふ　⑥ 人をして長寿たらしむと云ふ

（国語②問題　おわり）

国語 ①

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。解答番号は 1 ～ 15 。

もう四〇年以上も前のことだが、米国の先輩マイクが突然、研究室を訪ねてきた。東京での会議の帰りがけに、地球内部を再現する実験室を作り始めていた私を激励に来てくれたのだ。感謝の意も込めて、京都の湯豆腐を食していただこうとしたのだが、ステーキを食べたいと言う。なんでも、パートナーのキャサリンが豆腐などの日本料理にミリョウされ、好物の肉を食べさせてもらえないのだそうだ。

キャサリンが日本食に傾倒したきっかけは、一九七七年に発表されたマクガバン・リポートだった。連邦政府が、蔓延する生活習慣病対策として、動物性の脂肪分を控えて魚や植物性のタンパク質、それに炭水化物を多くとるようにとの食生活改善を提案したのだ。米国では、日本式のレストランといえば、料理人のパフォーマンスが売りのTEPPANYAKIがメインだったが、この発表以降にはSUSHI・BARが瞬く間に広がった。寿司とはいえ、当時は巻物が中心だったが、カリフォルニア・ロールは日本へと逆輸入されるほどの名物だった。やがて、欧州をはじめ全世界に広まったこのタイプの店では、他の日本食やサキ（酒）も人気を博すようになった。

そして二〇一三年に、和食がユネスコ世界無形文化遺産に登録されると、和食ブームはさらに加速した。1 ここで改めて念を押しておきたいことは、官民挙げての総力戦で文化遺産となったのは、「和食」そのものではなく、和食という「伝統的な食文化」であることだ。確かに和食は、多様で新鮮な食材、持ち味を尊重する技、栄養バランスが良く季節感あふれるメニューが特徴なのだが、自然の恵みに感謝し、「頂きます」そして「ご馳走さま」と手を合わせる、日本人の精神性こそが文化遺産の本質なのだ。

農林水産省の発表によると、二〇一九年には海外の和食レストランは一五万軒を超えたそうだ。だが、これで和食が世界を席巻しつつあると喜んでばかりはいられない。これらの和食レストランの多くは経営者も料理人も現地の人であり、畢竟

ブームに便乗した「擬きもの」が提供される。これではまったく和食文化の理解にはつながらない。

もちろん、例外もある。国家最優秀職人章（MOF）の資格をもち、「フレンチの神様」とも称されたジョエル・ロブション氏は、日本、そして和食とその文化をこよなく愛した料理人だった。彼の発案と言われ、今や世界中に広まりつつあるオーブンキッチンは、かれが割烹や寿司屋で学んだものだという。

一方、本家本元の日本国内でも、2 和食文化の将来は決してバラ色とはいえない状況だと観取する。もちろん私は、例えば「回転ずし」のように、寿司から派生して、もはや国民食と言ってもいいほどに根付いてきたものを誇るつもりはない。まるで開き直ったかのように軽躁な話題を取り上げるマスコミや、エゴイスティックな商業主義に煽られて、「日本人」が和食文化の本質を見失わないかと危惧するのだ。

例えばキャサリンが愛してやまない豆腐。大豆のタンパク質を抽出して凝固させるこの食品も、元は大陸から伝来した。製法は、水に浸して柔らかくした大豆をすりつぶした「呉」から「おから」を濾して（「生搾り」）豆乳を取り出し、加熱してにがりを加えて固めるというものだ。しかし、その後、豆腐作りは日本の「軟水」と相性がよく、タンパク質の抽出割合も高い方法、すなわち呉を加熱してからおからを搾り取る「煮搾り」へと進化していった。また、凝固剤のにがりが、軍需品に不可欠なマグネシウムの原料として第二次世界大戦中にはトウセイヒンとなった。そこで石膏の粉（すまし粉＝硫酸カルシウム）が使われるようになり、職人さんの創意工夫と相まって、滑らかさが際立つ京豆腐（嵯峨豆腐）が誕生した。このように日本の豆腐は独自の進化を遂げ和食文化を支える食品となったのだ。

今でも生搾りを用いる「島豆腐」は、沖縄の水が凝固成分のカルシウムやマグネシウムを多く含む硬水であるために、煮搾りには適さない。一方で、京都の水は超軟水であるので、煮搾りが向いていたのだ。もちろん、製法が異なるこれらの豆腐にはそれぞれの味わいがあり、それを活かした料理もある。

しかし、このような背景は等閑視して、煮搾りを十把一絡げに「大量生産」と揶揄し、生搾り豆腐こそが「伝統的」で「手間暇かけた」ものだと謳う業者や、それを大袈裟に取り上げるマスコミも多い。さらに、すまし粉はまったく安全で玉肌の豆

腐を生み出す優れた食品添加物であるにもかかわらず、「天然にがり」使用を必要以上に強調する輩もいる。読者各位にはこんな煽動に惑わされることなく、ぜひご自分で食べ比べて、それぞれのよさをご実感いただきたい。

同様の風潮は、和食の最良の友である日本酒にも見受けられる。「純米酒神話」だ。「何も加えない米だけで造った酒」というプロパガンダは、醸造用アルコールを添加することで吟香が引き出される「本醸造酒」を貶めるかのようだ。「当店は蕎麦に合う入手困難な純米酒しかお出ししておりません」などと嘯く今風の店のオーナーは、3 頑なまでに灘の本醸造酒を提供する下町蕎麦屋の親父の言い分をご存知なのだろうか？

そのほかにも、熟成という技が魚の旨味を引き出すにもかかわらず、死後硬直の食感を騒ぎ立てる「新鮮神話」など、和食文化を崩壊させかねない状況は多々ある。これでは、せっかく海外からいらっしゃるお客様にも、申し訳ない。

4 ところで、和食の特徴を述べる際に必ずと言ってよいほどに使われるのが、「豊かな自然が育んだ食文化」というフレーズ。確かに日本の風土はサンシスイとも表現されるように美しい。しかし、豊かな自然は、何も日本の専売特許ではない。すなわち、和食の本質に迫るには、5 特色ある食材がどのような自然によって育まれたのかをきちんと理解する必要があろう。それには、地球上で最も震源地や火山が密集する「変動帯」日本列島で、和食を育む自然が誕生した地質学的な背景を知ることが大切だ。そうすれば、世界の料理の中でも和食がオンリーワンであることを認識できるだろうし、きっと和食をもっと美味しくいただけるに違いない。私はこのようなアプローチを「美食地質学」と呼んでいる。詳しくは拙著『和食はなぜ美味しい――日本列島の贈り物』（岩波書店）をご覧いただくとして、一つ例をあげることにしよう。

縁起物としてハレの日には欠かせない鯛。日本の沿岸に広く生息する魚だが、ブルーのアイシャドウに飴色の身をもつ「明石鯛」は別格である。まるで川のように流れる明石海峡の潮にもまれて育つ鯛は筋肉質で、エネルギー源であるATPが豊富だ。そしてこの物質が分解熟成して旨味成分イノシン酸となるのだ。

瀬戸内海には、高速潮流の瀬戸（海峡）と、比較的海が広がり穏やかな灘が交互に配置している。瀬戸では潮流が鯛や蛸を育み、灘は泥質の海底に穴子や鱈が暮らす。このような特異な内海の地形を造ったのが、フィリピン海プレートの運動だ。こ

のプレートは、元々は北向きに沈み込んでいたのだが、現在の関東地方の地下深い所で巨大な太平洋プレートにぶつかってしまった。それで仕方なく約三〇〇万年前にやや西向きに、すなわち西日本に対して斜交する方向へと運動を変えたのだ。そのことで地盤の古傷でもある「中央構造線」が断層としてズレ出し、それに伴って断層の北側、すなわち瀬戸内海周辺には複数のシワが寄るように隆起域（瀬戸）と沈降域（灘）が形成された。明石鯛などの瀬戸内海の豊かな幸は、このようなダイナミックな変動がもたらしたのである。

ここで忘れてならないのは、隆起や沈降などの地殻変動は、断層運動を伴う場合が多いことだ。つまり、瀬戸内海の地形が成立する過程では、数え切れないほどの地震が起きてきたに違いない。その一つが一九九五年の兵庫県南部地震（阪神淡路大震災）である。この直下型地震は、淡路島から明石海峡を経て六甲山地へと続く隆起帯と、大阪湾という沈降域の境界をなす断層がずれ動いたものだ。

つまり私たちは、海のコクソウチタイと呼ばれるほどに豊かな瀬戸内海の恩恵に浴す一方で、直下型地震という試練も与えられているのだ。

このように和食文化は、「変動帯の民」が、繰り返し試練を与える日本列島にイケイの念をもちながらその恩恵に感謝する、言い換えると日本列島に抱かれるように暮らしながら育んできたものなのだ。だから、この変動帯特有の文化やその背景にある日本人の感性は、地質学的に「安定大陸」と呼ばれ、地殻変動や火山活動による自然災害が比較的少ない地帯で、しかも自然を人間の支配対象と見なす一神教が広まった地域の文化とは決定的に異なる。

自然とのしなやかな共生は、これからもこの日本列島に暮らして行こうとする変動帯の民の規矩となるに違いない。そればかりか、同様に、いや日本列島以上に複雑かつスケールの大きな変動を繰り返す「水惑星地球」で、人類が「人新世」を生き抜いてゆくプリンシプルになるのかもしれない。

一方で、6 人類が歩んできた時間ですら刹那と感じてしまう地球科学者には、気になることがある。記録にも記憶にもない試練が私たちを待ち構えていることだ。その一つが、直近ではわずか七三〇〇年前に九州南方沖の「鬼界海底カルデラ」で発生

国語〔B方式 11/20〕

ますますシンコクな事態となる。
② ケイコクに響きわたる鳥のさえずり。
③ イッコク一城の主。
④ ザッコクを白米に混ぜて炊く。
⑤ 委員会から是正のカンコクを受ける。

d コクソウチタイ 4

① イキョクを尽くして説明する。
② 心からケイイを表する。
③ 誠にイカンに存じます。
④ 戦地をイモンする。
⑤ 先輩にイフの念を抱く。

e イケイ 5

問二　――線部甲～丙の語句の意味として最も適当なものを、それぞれ次の①～⑤の中から一つずつ選び、マークしなさい。解答番号は 6 ～ 8 。

甲　畢竟 6
① 場合によっては　② 悪くすると　③ 自然なこととして
④ 地域の特性として　⑤ 最終的には

乙　こよなく 7
① 何よりも　② 長い年月の間　③ 無理なく
④ 独自のやり方で　⑤ 格調高く

丙　等閑視して 8
① あながち　② すべからく　③ なおざりにして
④ ひとしなみに扱って　⑤ 蔑視して

問三　――線部1「ここで改めて念を押しておきたいこと」とありますが、その説明として最も適当なものを、次の①～⑥の中から一つ選び、マークしなさい。解答番号は 9 。

① 和食の特徴は、豊かな食材を活かす調理法をもって、四季に合わせた献立を提供することにあるということ。
② 和食とは、風土と技術とが生み出した食材をもって初めて誕生することができたということ。
③ 豊かな自然が育んだ食材や技術があるからこそ、自然の恵みを重視する和食文化が生まれたということ。
④ 食事のたびに自然の恵みに感謝の念を捧げるような、文化としての側面にこそ和食の特徴があるということ。
⑤ 日本の地を離れて和食の精神性を理解することは難しいから、海外では和食文化への理解は進展しないということ。
⑥ 海外の料理人が和食を学んだとしても、オープンキッチンのように異質なものを作り上げてしまうということ。

問四　――線部2「和食文化の将来は決してバラ色とはいえない状況だ」と筆者が述べるのはなぜですか。最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークしなさい。解答番号は 10 。

① 和食を代表する寿司料理でさえ、その伝統から外れた「回転ずし」があたかも国民食であるかのように根付いてしまっているから。
② 評判や売り上げを追求するためにさまざまな「神話」が流布したことで、和食文化を伝統にのっとって理解する基準が失われてしまったから。
③ 例えば大陸から伝来した豆腐が大きく製造法を変えたように、食品の伝統的な作り方が守られない現状では和食文化を維持することが難しいから。
④ 和食文化は風土と安全ですぐれた技術とによってもたらされるものであるが、そのような本質が見失われるおそれが現実のものとなっているから。
⑤ 安全な食品添加物を用いた本醸造酒は全般的に純米酒よりすぐれた品質をもつにもかかわらず、そのことが広く知られていないなど、和食文化の知識の普及に問題があるから。

した超巨大噴火だ。今後の一〇〇年間に一パーセントという、決して安心できない確率で、日本列島では当たり前のように発生するこのカタストロフは、現状のままでは日本喪失も引き起こしかねない。

変動帯の民は、荒ぶる日本列島に暮らしながら和食文化を培ってきた。私たちも、和食をいただける有り難さを噛みしめながら、この日本列島からの恩恵を、子々孫々も享受できるにはどうすればよいかを強かに考えたいものだ。これが私たちの世代の責任ではなかろうか。

（巽好幸「和食文化を育む世界一の変動帯、日本列島」による）

注1　四〇年以上も前＝この文章は二〇二二年に発表されたものである。
注2　カリフォルニア・ロール＝アボカドなど洋風の具材を海苔を内側にして巻く巻き寿司。
注3　オープンキッチン＝客席から見えるように作られた調理場。
注4　ATP＝アデノシン三リン酸。生物の体内でエネルギーを伝達する物質。
注5　「人新世」＝人類の活動が地球環境に変化をもたらして以降を指す地質的な時代区分。

問一　――線部a～eの漢字と同じ漢字を含むものを、それぞれ次の①～⑤の中から一つずつ選び、マークしなさい。解答番号は 1 ～ 5 。

a ミリョウ 1
① ノウリョウの盆踊り。
② 伝統的な鹿のシュリョウ方法。
③ 著書がコウリョウを迎えた。
④ 選手のギリョウを審査する。
⑤ 機械の性能をカイリョウする。

b トウセイヒン 2
① 摩擦でセイデンキが起こる。
② ケイセイが逆転した。
③ カンセイカンが航空機と通信する。
④ 受付で自らのセイメイを名乗る。
⑤ 若者らしいトウセイフウの考え方。

c サンシスイメイ 3
① 探偵のメイスイリ。
② メイカイな解説で理解できた。
③ メイキュウから抜け出す。
④ 講演にカンメイを受ける。
⑤ あの人とは長年のメイユウ関係にある。

問七 ――線部5「特色ある食材がどのような自然によって育まれたのか」とありますが、ここでいう「自然」の具体例として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークしなさい。解答番号は 13 。

① 必ずしも日本にばかり誕生したものではなく、自然災害が比較的少なく一神教が信じられるようになった地帯でも広く見られる豊かな自然。

② 流れの速い潮が鯛や蛸を育む「瀬戸」と、穏やかな流れの潮が穴子や鱧にとって住みよい「灘」とが交互に配置して、多様な海産物をもたらしている海域。

③ 日本からはるかに離れているフィリピン海プレートの運動によって多様な内海の地形が生まれた結果、豊かな海の幸に恵まれた瀬戸内海。

④ 豊かな瀬戸内海の恩恵に浴す一方で、淡路島・六甲山地という沈降域と大阪湾という隆起域によって、直下型地震という試練がもたらされる地域。

⑤ 自然を人間の支配対象と見なす一神教が広まった地域に見られるような、地殻変動や火山活動による自然災害が比較的少ない地帯。

問八 ――線部6「人類が歩んできた時間ですら刹那と感じてしまう地球科学者」とありますが、その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークしなさい。解答番号は 14 。

① 人類の歴史は長いが、いずれ消え去ってしまうむなしいものだととらえている地球科学者のこと。

② 人類の住む場所によって自然災害は多いことも少ないこともあったが、その差をも過大評価しない地球科学者のこと。

③ 人間ひとりの人生をはるかに超える時間を悠久のように感じて研究対象とする地球科学者のこと。

④ 人類の歴史のほとんどは記録に残っていないため、ほんの短い期間と錯覚しがちな地球科学者のこと。

⑤ 何千年、数百万年に一度という頻度で起こる地殻変動をも眼前の問題として捉える地球科学者のこと。

問九 本文全体の**要旨**として最も適当なものを次の①～⑤の中から一つ選び、マークしなさい。解答番号は 15 。

① 生活習慣病対策として魚や植物性タンパク質、炭水化物を多く摂取するためには、地殻変動によって生まれた瀬戸内海の豊富な海産物が有効である。

② ユネスコの世界無形文化遺産となったのが、「和食」そのものではなく、和食という「伝統的な食文化」である、ということを重視するだけでなく、地質学をもあわせて理解しなければならない。

③ われわれは和食を伝えてゆかなければならないが、そのためには和食の文化的側面を軽視しないだけではなく、進んだ食材加工技術をも取り入れてゆくべきである。

④ 日本列島を取り巻く地殻変動は、列島そのものを存亡の危機に立たしめる一方でよい食材をもたらしてきたものでもあるので、きたるべき試練に備えつつ、和食を伝えてゆく必要がある。

⑤ 美食の前提として存在する地質学的背景を知らなければ、和食文化への正確な理解が妨げられてしまうし、世界の料理で和食がオンリーワンであることを認識できなくなってしまう。

（国語①問題　おわり）

問五 ――線部3「頑ななまでに灘の本醸造酒を提供する下町蕎麦屋の親父の言い分をご存知なのだろうか？」とありますが、その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークしなさい。解答番号は 11 。

① 純米酒神話に躍らされた経営者は、吟香の価値を理解して本醸造酒を提供する店主の意図を理解するべきだ、と筆者は非難している。

② 米だけで造った純米酒が本醸造酒に勝ることは自明であるにもかかわらず、あえて本醸造酒を客に出す店は和食と日本酒の最良の関係を理解していない、と筆者は嘆いている。

③ 自らの出身地で造られた酒に固執する店主に心意気を感じ、一概に純米酒ばかりをありがたがるべきではない、と筆者は警鐘を鳴らしている。

④ 従来の本醸造酒に執着する昔かたぎの店主をたしなめつつ、純米酒の希少性にしか目を向けない流行り物好きの店主にも筆者は反省を促している。

⑤ 本醸造酒の魅力を知った上で客に出す店主を筆者は高く評価する一方、そのような魅力に目をつぶり、純米酒こそが優れていると偽る風潮に疑念を抱いている。

問六 ――線部4「ところで」という接続詞によって前後の文章はどのように展開していますか。最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークしなさい。解答番号は 12 。

① 「ところで」は話題を変えることを表す接続詞であり、その前は和食文化の将来を危ぶむ内容であったのに対し、その後は和食を育む日本独自の自然環境を取り上げている。話題を転換しつつも、日本特有の食材が瀬戸内海の地形をもたらしたことがわかるという、謎解きのような展開になっている。

② 「ところで」は話題を転換することを表す接続詞であり、それ以前は食材を、それ以降は地質を主に取り扱っている。ただし、和食文化を理解するためには両者の知識が必要であることから、転換する前の話題をふまえて転換後に核心的な主張を行うという、転換の前後それぞれに重みのある展開になっている。

③ 「ところで」は別の話題を持ち出すときに用いられる接続詞であり、そこまでは和食文化が世の中から誤解を受けていることに警鐘を鳴らしているが、以降は筆者の研究内容を紹介するものとなっている。全体的に、日本列島そのものの存続の危機という主題へと導く展開になっている。

④ 「ところで」はそれまでの話題からいったん離れることを表す接続詞であり、それまでは和食に関する「神話」の数々を紹介していたが、以降は地質学的な定説を述べている。和食という前置きから、本題である筆者の専門分野へといざなう展開になっている。

⑤ 「ところで」は話題を添加しつつ議論を深めることを予告する接続詞であり、それ以前は和食文化をおびやかす言説を、それ以降は自然科学的な内容を交えた食文化の話題を取り上げている。「ところで」の前後は、一貫して和食文化の特徴を考察する内容であり、互いに深い関わりを持たせた展開になっている。

国語〔B方式 11/20〕

国語 ②

次の文章はある二人の人物の出会いの場面です。読んで、後の問いに答えなさい。解答番号は 1 ～ 21 。

頃は六月十五日の夜のことなるに、洛中をここやかしこと何ひ見れども、さるべきものもなかりけり。やうやう歩み行くほどに、北野の御前に参りけり。武蔵がその夜の装束は、いつも好みしことなれば、白き帷子の脇深く解かせ、注3 a 注1 1 褐の鎧の直垂 b に黒糸威の腹巻に、雲に竜の小手を差し、注5白檀磨きの脛当に、四尺余りの大太刀を注6鵡やうにおつそばめ、八尺余りの八角棒、左右に石突をすげさせ、ところどころに金抱を打たせ、中の手だまりをば琴の糸にてみしと巻き、弓手の小脇にかいこうで……、神前の広庭に仁王立ちにぞ立ちたりける。

御曹司のその夜の装束には、白き袷をひつ違へ、精好の大口に浅黄の直垂を召し、薄化粧、鉄漿黒く、薄衣取つてうちかづき、黄金作りの御佩刀を脇にそばめ、社壇の御前に腰を掛け、念誦してぞおはしける。

かの弁慶が姿を御覧じて、「ものけしからずのありさまや。西塔の武蔵坊弁慶とて、日本一 1 のをこの者ありと聞きしが、もしそれにてやあるらむ。それも人間の者なれば、かほどに色黒く、背高くはよもあらじ。愛宕、比良の天狗は我に慣れたれば、大概見知りて覚ゆるなり。2 いかさま鬼満国の鬼神が、我を悩まさむとて来たりたるや」と、御覧ぜらるるところに、弁慶また思ふやう、ここなる男の尋常に気高さよ。これやこの音に聞く牛若殿にてあるらむ。3 よし何にてもあらばあれ。あれほどの小男が何ほどのことのあるべきぞと、これも念誦する気色にて、なほよく姿を見むために、注11苛高の数珠取り出だし、真言にてもなし、御経にてもなし、舌にまぎらかして、ただ「ろんろん」と言ひ、後には「ぐれんぐれん」と言ひて、数珠押し摺りて、その間に御曹司の風情を見ければ、人に一様変はりて、眼の内さし現はれ、注13板歯少しそり出でて、色白くて気高くこそましましけれ。

持ち給へる御佩刀は黄金作りと見なして、奪はむことはいと易しとて、あらあら値をぞさしたりける。これを書注14写山に参らせたらば、一坊の造立のさしあはせにはなるべし。なむぼうの身にてかあるらむ、とく打ち落として見むずるものをと思ひて、

一二度前を通りしが、第三度目に脇に挟みたる八尺棒をおつ取り直し、ちやうど打つ。御曹司は御覧じて、弾に慣れたる鳥の風情、騒ぐ気色もなく、御佩刀をするりと抜きかかり、はつしと合はせ、弓杖三杖ばかり跳ね越え、「夜陰のことなれば、人違へか。あの御坊」とぞのたまひける。弁慶、これを聞き、「憎き男の御坊言葉や。物見せむ」と言ふままに、隙間をあらせずかかりけり。

御曹司御覧じて、この御坊がふるまひを見むずるものをと思し召し、かつぱと打てば、3 ちやうど障へ、弓手馬手に受け流し、御坊が手並みのほどを御覧じけるこそ恐ろしけれ。「彼奴は棒には上手なり。兵法知らずは、この御坊に打たれつべしとも覚えず。さらば、手並みを見せむ」とて、使ひける八尺棒を一寸離 4 てはずんと斬り、二寸離けてはずんど斬り、ずんずんに斬り給へば、弁慶思ふやう、かりそめながらこの冠者が斬つ手のやうのおもしろさよ、誉めばやと思ひて、「あ、斬つたりや、小冠者」と二三度誉めてぞのののしり、件の大太刀するりと抜き、「余すまじ」とてかかりけり。御曹司、御覧じて、「何の宿意ぞ、御坊よ。出家の姿なれば、命をば助くるぞ。はや罷り退け」と仰せある。弁慶、これを聞くよりも、なほ安からず思ひて、「わ男の命をこそ助けじは、この法師がままなるに、かへつて我を許さむとや。4 言葉の勝負は無益なり。参り候」と言ふままに、隙間もなくぞかかりける。

御曹司は鞍馬の奥僧正が谷にて、兵法をば極めつ。弁慶は本朝にて隠れもなき太刀には上手なり。注16銑と鑓と、岩と金のごとくにて鍔鉄を鳴らし、鎬を削り、半時がほどこそ戦ひけれ。

弁慶が打つ太刀は、御曹司の腰の辺りを隙間もなくぞ見えにける。御曹司の御佩刀の切先は、弁慶が首の辺りをひまなくこそは閃きけれ。御曹司思し召すは、この御坊が首打ち落とさむは易けれども、彼奴は子細もなき強者なり。命を助けおき、召し使はむと思し召し、小鷹の法を召されて虚空に上がり給ひき。拳を強く握り、弁慶がつぶりを割れて退けと、二三度こそは張られたれ。弁慶は目がくらみ、太刀を支へて立ちたりけり。

その時、御曹司は御佩刀の刀背にて弁慶が二の腕を打ち給ひ、太刀打ち落として召されば、武蔵坊は c 木に離れたる猿のごとくにて、5 6 あきれてこそは立ちにけれ。その後、御曹司仰せけるは、「いかに御坊、太刀は惜しくは思はぬか。惜しく思はば、

取らすべし。いかにいかに」とのたまへども、6 しばしは返事もせざりしが、ややありて思ひけるは、多くの者に会ひたれども、これほどに程なく、目算にも及ばず、負けたることはいまだなし。「腹立ちさよ」とつぶやきけるが、太刀を乞うてくれむところを、取つて引き寄せ、組み伏せて、今の遺恨を散ぜむと思ひ、「我が物なれば惜しきなり。賜び給へ」とぞ申しける。

（『弁慶物語』による）

注1 北野＝現在の北野天満宮（京都市上京区）。菅原道真をまつる。
注2 帷子＝裏をつけない着物。
注3 褐＝濃い紺色。
注4 黒糸威の腹巻＝黒糸で威した鎧。「威」は鎧の札を糸や皮でつづること。
注5 白檀磨き＝金箔置きの上に透明度の高い漆を塗ったもの。
注6 鵡やう＝鵡の尾羽がはね上がっているように、刀の鞘の先端を高くして佩くこと。
注7 精好の大口＝「精好」という絹織物の一種でできた裾の口の広い袴。
注8 鉄漿＝歯を黒く染める染料。
注9 西塔＝比叡山延暦寺（滋賀県大津市）の中で西北にあたる地域の総称。
注10 愛宕、比良＝「愛宕」は京都市右京区西北部にある愛宕山。「比良」は滋賀県の琵琶湖西岸に広がる比良山地。どちらも天狗の住む地として知られる。
注11 苛高の数珠＝そろばんの玉のように平たく、角ばった玉の数珠。
注12 「ろんろん」、「ぐれんぐれん」＝どちらも呪文を唱えて祈禱するさま。
注13 板歯＝上の前歯。
注14 書写山＝書写山円教寺（兵庫県姫路市）のこと。弁慶が円教寺の僧たちと争い、炎上させてしまったことが、問題文より前の場面に

描かれている。
注15 御坊言葉＝ここでは「御坊」と呼んだ言葉遣いのこと。
注16 銑と鑓＝穴をあけるノミと磨くヤスリ。

問一 ～～線部「ば」1～6（解答番号同じ）の文法的説明として最も適当なものを、それぞれ次の①～⑥の中から一つずつ選び、マークしなさい（同じ記号を何度選んでもかまいません）。

① 接続助詞（順接確定条件）
② 接続助詞（順接仮定条件）
③ 係助詞「は」の濁音化したもの
④ 格助詞「は」の濁音化したもの
⑤ 終助詞の一部
⑥ 副助詞の一部

問二 ═線部a「六月」、b「直垂」の漢字の読み方として最も適当なものを、それぞれ次の①～⑤の中から一つずつ選び、マークしなさい。解答番号はaが 7 、bが 8 。

7 a「六月」
① はづき ② みなづき ③ むつき ④ さつき ⑤ ふみづき

8 b「直垂」
① ちょくすい ② のうし ③ ひたたれ ④ すいかん ⑤ かりぎぬ

問七 ――線部4「言葉の勝負は無益なり。参り候」とは、どのようなことですか。最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークしなさい。解答番号は 14 。

① 言葉での争いではかなわないと、負けを認めたということ。
② 言葉での争いに虚しさを感じ、落胆したふりをしているということ。
③ 言葉の上では勝ち負けをつけることができないと、見切りをつけたということ。
④ 言葉で争うことにより御利益がなくなるので、改めて参詣したいということ。
⑤ 言葉で争っていても無駄だと、攻撃を宣言したということ。

問八 ――線部6「しばしは返事もせざりし」とありますが、それはなぜですか。最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークしなさい。解答番号は 15 。

① 太刀を取り上げるという非道な行いに対し、衝撃で言葉を失ったから。
② しばらく返事をしないでいることによって、相手を油断させようとしたから。
③ 拳で頭を殴られたことによって、目がくらんで言葉が出なくなっていたから。
④ 太刀を取られて悔しいが、すぐに返してほしいと言うのもはばかられたから。
⑤ これまでの争いを思い出して、太刀を取られた原因を考えていたから。

問九 ≡線部c「木に離れたる猿」について説明した次の文章の 16 ・ 17 （解答番号同じ）に入る最も適当な語を、それぞれ後の①～⑤の中から一つずつ選び、マークしなさい。

このことわざは前漢時代に成立した故事説話集である『説苑（ぜいえん）』に「猿猴（えんこう）木を失ふ」とあるのがもとであるが、これを白文に戻すと「 16 」となる。「猿猴」は猿類の総称である。これと反対の意味を持つことわざに「 17 」などがある。

16
① 猿猴木失　② 木猿猴失　③ 失木猿猴　④ 失猿猴木　⑤ 猿猴失木

17
① 水を得た魚　② 猿も木から落ちる　③ 河童の川流れ　④ 猿猴が月を取る　⑤ 弘法も筆の誤り

問十 ≡≡線部「御曹司」について説明した次の文章の 18 ～ 21 （解答番号同じ）に入る最も適当な語を、それぞれ後の①～⑥の中から一つずつ選び、マークしなさい。

「御曹司」は、文中で「 18 」とも呼ばれているが、 19 のことである。この人物を主人公とした軍記物語として、「 20 」がある。一方、問題文の主人公である弁慶は、その実態はほとんど不明である。しかし、物語や能・浄瑠璃などの芸能を通じて次第にその人物像が形成され、弁慶は強い者のたとえとしても使われている。「弁慶の泣き所」という、弱点をあらわすことわざも生まれたが、「泣き所」とは 21 のことである。

18
① 生若殿　② 御坊　③ 鬼神　④ 天狗　⑤ 出家　⑥ 猿

19
① 平将門　② 源頼朝　③ 平敦盛　④ 源義経　⑤ 平清盛　⑥ 源義家

20
① 平家物語　② 承久記　③ 義経記　④ 保元物語　⑤ 平治物語　⑥ 太平記

21
① 脇腹　② むこうずね　③ ひざ　④ 足の裏　⑤ ふくらはぎ　⑥ かかと

（国語②問題　おわり）

問三 ――線部1「をこの者」、5「あきれて」の意味として最も適当なものを、それぞれ次の①～⑤の中から一つずつ選び、マークしなさい。解答番号は1が 9 、5が 10 。

9
1「をこの者」
① おろかな者　② 勇敢な者　③ 強力な者　④ 図々しい者　⑤ 短気な者

10
5「あきれて」
① 愛想をつかして　② あっけにとられて　③ すばらしさに驚いて　④ 飽きてしまって　⑤ やる気をなくして

問四 ……線部「かいこうで」を元の形に戻すとどうなりますか。最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークしなさい。解答番号は 11 。

① かいこんで
② かきこみて
③ かしこみて
④ かひこうで
⑤ かちこして

問五 ――線部2「いかさま鬼満国の鬼神が、我を悩まさむとて来たりたるや」と考えたのは、どういうことによるものでしょうか。**適当でない**ものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークしなさい。解答番号は 12 。

① 色の黒さや背の高さから、目の前にいる男が人間に見えないということ。
② 西塔の武蔵坊弁慶という者は鬼であると聞いたことがあるということ。
③ 愛宕や比良の天狗もよく知っているがその天狗ではないということ。
④ 目の前の男があやしげな雰囲気を持っているということ。
⑤ 金具を打ち付けた長い棒を持ち、仁王立ちに立っている姿を見たこと。

問六 ――線部3「よし何にてもあらばあれ」の現代語訳として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークしなさい。解答番号は 13 。

① もし何かあっても気にしないでくれ
② 何かよいことが起こるようにしてくれ
③ たとえ何であってもなるようになれ
④ 何か由緒があるならば教えてくれ
⑤ 身分の高い誰かであってくれ